

ドイツの5・8終戦記念日とナチズムの復活

ピーター・シュヴァルツ著、脇浜義明訳、田中一弘補訳 脚注はすべて訳注

原典： World Socialist Web Site, 2023年5月12日



2023年5月9日火曜日、ドイツ・ベルリンで、戦勝記念日とヨーロッパでの第二次世界大戦終結の78周年記念日に、トレプトウの公園にあるソ連戦争記念墓の外で、ハンマーとカマを示すシャツを着た男性に、警察官がジャケットを閉じるよう求めている。[AP Photo/Markus Schreiber]

5月8日と9日にヨーロッパにおける第二次世界大戦終了、ナチズムの支配からの解放を記念するいろいろな行事がベルリンで行われてきた。1945年のこの日にナチス・ドイツ国防軍が、フランスのランス、及びドイツのベルリンーカールスホルストで、無条件降伏に署名した。ナチ政権がついに滅びたのであった。アドルフ・ヒトラーはその8日前に自殺した。

侵攻してきたナチス・ドイツ軍と闘い、それを撃退してアウシュヴィッツなどを解放したのはソ連の赤軍で、多大な犠牲を払った。少なくとも1300万人の赤軍兵士と1400万人のソ連民間人が死亡した¹。しかし、今年はベルリン上院の決定で、ソ連・ロシアの旗の展示が禁止され、その禁止令の施行のために1500人の警官が動員された。観光客より警官の数の方が多かった。

他方、ウクライナの旗の掲揚は許可された。この旗は第二次大戦中ナチに協力したファ

¹ この解放記念日をソ連やロシアがベルリンで記念行事を行うのは当然で、トレプタワー公園、ティーアガルテン、シェーンホツツア・ハイデにあるソ連の三つの記念施設で旗が掲げられてきた。

シスト団体が使った旗である。ファシスト組織のウクライナ民族主義（OUN）のアンドリー・メルニク派の旗は今もウクライナで使われている²。ナチと闘った赤軍の中にはウクライナ人もたくさんいたが、OUN はドイツの SS と行動を共にし、ユダヤ人、ポーランド人、ロシア人、ウクライナ人の大量殺戮に手を貸した。

記念式典にソ連やロシアの旗の掲揚の禁止命令を出したのはベルリン・ブランデンブルグ高等行政裁判所であった。初め警察はソ連、ロシア、ウクライナの旗の掲揚を禁止した。ウクライナ戦争を背景に暴力を誘発する恐れがあるという理由での措置だった。ところが訴訟が生じたので、高等行政裁判所はいったん禁止を解いた。しかし、警察の要請で、ソ連とロシアの旗は禁止するが、ウクライナの旗を許可する決定をした。

この決定の政治的意図は明白である。ナチ政権崩壊後 78 年目にドイツ首都で解放側のシンボルが禁止され、ナチ協力者のシンボルが肯定される事態となったのである。ナチ政権関連のことがこんな公けの形で肯定されたのは初めてである。

これは例外的現象、あるいは偶々の逸脱ではない。ドイツの権力筋はナチ犯罪を、否定とまではいなくても、矮小化する努力を陰に陽に行ってきた。ナチ賛美とまではいなくても、その功績を認める傾向があった。この傾向に反対する声は主要メディアからも既成政党からも上がらなかった。

ナチの国家社会主義をあまり批判しない傾向に伴って進行するのがドイツの軍国化である。2014年に IYSSE（社会的平等のための国際的若者と学生）は「ドイツ軍国主義の復活はナチ犯罪の些末化、歴史の塗り替えを伴う」と警告を発した。この社会平等党（SGP）の青年組織はまた歴史学者ヨルク・ハベロフスキに抗議した。ハベロフスキは『デア・シュピーゲル』でナチ賛美者エルンスト・ノルテを褒め称え、ヒトラーを「危険人物ではない」と宣言したのだ。

その当時から現在までの間に IYSSE の警告の正しさがますます確証された。その当時でも、メディアも、ハベロフスキが所属していたフンボルト大学も、政治家たちもハベロフスキを支持し、極右教授を批判した IYSSE を非難したのであった。右翼やファシストとの密接な連携が一般化していった。それは極右政党ドイツのための選択肢が多くの委員会で席を占めているドイツ議会ばかりでなく、ドイツ政府の対外政策にも見られる。

ドイツが武器支援するゼレンスキー政権がナチの大量虐殺に協力したウクライナ右翼の銅像を建て、通り名に彼らの名とつけて賛美し、ウクライナからロシア文化を一掃（プーシキンなど世界文学などの禁書）し、左翼政党を非合法とする事実にも、ドイツ政府は何も言わない。バルト海諸国でもドイツ政府とドイツ軍はナチ SS を英雄として崇拝する勢力を支援している。

ドイツ国民が日々洪水のように浴びせられている好戦的プロパガンダを見聞きしていると、ドイツ政治権力者の多くはヒトラーがモスクワ征服と破壊を成し遂げなかったことを

² OUN は穏健派と言われたメルニク派と過激派と言われたステパン・バンデーラ派の二派で構成されていた。ゼレンスキー大統領はバンデーラを民族英雄として記念像を設置した。

悔しがっているような印象を受ける。

F. A. Z (フランクフルト・アルゲマイネ・ツァイトング) 新聞の5月7日号にジャーナリストのコンラッド・シュラーは長文の解説記事を書き、ウクライナに早急にNATOに加盟して「核の傘」に入れと勧告した。彼は、ゼレンスキーが宣言した春の攻勢が不首尾に終わったら、「苦しいこう着状態」になるぞと言った。こう着状態が長く続くと、「少ない予算でウクライナに兵器支援を続けるよりも他の必要なことに金を使う方がよい」と思うようになるかもしれない、と警告した。「NATOは物質的・イデオロギー的支援でかなり危ない橋を渡ってきたので、今後はウクライナ支援が空手形になる恐れがある。」ウクライナ支援の西側同盟国も、タカの姿を見て分散するヒヨコのように、バラバラになるだろうと予想した。そうならないように、ウクライナは現在の支援よりも多い金と兵器の援助を要求すべきであると結語した。

ヒトラーのためにヨーロッパとドイツの大部分が瓦礫の山と化してから80年も経っていないのに、シュラーのような好戦論者が出現し、西側の帝国主義的な世界覇権のためには核戦争も厭わない姿勢を吹聴する時代となった。

本音のところでは、ドイツの支配階級はヒトラーの敗北を受け入れていない。ドイツの国家元首が5月8日を「解放の日」と認めたのは戦後40年も経過してからであった。それでも、ニュルンベルク裁判で戦犯となった父親を持つ第八代大統領リヒャルト・フォン・ヴァイツェッカーは「5月8日は我々ドイツ人にとっては祝賀すべき記念日ではない」と当時付言した。

今日では、ヴァイツェッカーのキリスト教民主同盟のSNSメッセージは「1945年5月8日は『解放記念日』であるが、同時に『測り知れない苦しみの日』でもある」とある。誰にとっての『測り知れない苦しみの日』なのかは書いていない。ナチ強制収容所を生き怒った人々にとってか？ ナチの魔の手を逃れることが出来た少数のユダヤ人にとってか？ ナチに迎合しなかったためにゲシュタポに虐待された労働者にとってか？ ナチに辛酸をなめさせられたギリシャ人、ユーゴスラビア人、ポーランド人、ソ連人にとってか？ 若者のとき徴兵で前線へ狩り出されたドイツ人にとってか？ おそらく彼らが意味しているのは、アリア化政策や強制労働から利益を得たナチの取り巻きや企業家で、敗戦のとき不当利得財産を没収されるのではないかと心配した連中のことであろう。戦時中に不当の得た財産は今も続き、彼らは戦後もずっと権力筋にいる。

1986年にナチの国家社会主義を賛美し再建を主張した歴史家エルンスト・ノルテは、そのために起こった歴史論争で大批判を浴びた。しかし、その後の2014年にハベロフスキがノルテを称賛する論説を書いたときは、もろ手を挙げて歓迎された。もし現在ノルテが生きていたら（彼は2016年に死亡）、いろいろ賞を受けていることだろう。

国家社会主義復権には客観的理由がある。現在のドイツの資本主義は、20世紀初頭のドイツ資本主義と同じように、解決不能な矛盾に直面している。そして、過去と同じように、野蛮な戦争という方法でそれを解決しようとしているのだ。

20世紀初め、後発ドイツ経済はヨーロッパの片隅で、原材料、投資機会、市場を求めていたが、それらはすでに植民地列強が分割支配していた。ドイツは列強と闘ってそれらを獲得しようとした。フランスや英国、ロシアと闘った。フランスと同盟関係を組んでいた帝政ロシアの広大な領土はドイツにとって絶好の機会であった。

しかし、ドイツは戦争に負けた。それどころか、革命の危機に見舞われた。ドイツ資本主義を革命から救ったのは社会民主主義であった。第一次政界大戦で漁夫の利を得たのは途中から参戦したもう一つの新興国、米国であった。

第一次世界大戦敗北の惨めな結果を修正し、第一次世界大戦で試みたことを今度は成功させようとしたのが、第二次世界大戦であった。ドイツはヨーロッパ支配、ソ連崩壊、米国の世界覇権への挑戦を狙って、1933年1月、パウル・フォン・ヒンデンブルグと経済界と軍事界の大物たちの陰謀で、アドルフ・ヒトラーを政権の座に就けた。ヒトラー政権には二つの任務があった。労働運動の暴力的粉砕と国民を再軍備と戦争の支援に動員すること、である。

しかし、またもやドイツは敗戦した。ドイツ資本主義は、一つには米国がソ連への防波堤を必要としていたこともあって、生き残った。米帝国主義の余波を受けて、ドイツ資本主義は戦後の数十年間で息を吹き返し、急発展した。しかし、ソ連崩壊の後、帝国主義大国間の対立が激化した³。米国は覇権と経済力の衰弱にあせって、次々と戦争を行い、ドイツは直接的・間接的にそれを支持し、ヨーロッパの指導国、世界の指導国になろうとした。ウクライナ戦争が始まると、それを利用してドイツは1945年以降最大の再軍備化に走った。米国と同じようにウクライナに兵器を与え、対ロシア代理戦争を拡大し、国内軍事資本を儲けさせた。それが核戦争発展する危機を孕んでいることに無頓着に。

こういう情勢が、ヒトラーに対する姿勢の変化を加速させたのだ。ヒトラーがソ連、マルクス主義、組織労働運動を嫌悪していた点が評価された⁴。とりわけ、都市部の豊かな中産階級が西側帝国主義から恩恵を受け、株や不動産ブームで所得を増やし、帝国主義に好意を抱いている。一方労働者階級はその犠牲で所得を減らした。このことが、かつては反ファシズムで平和主義であった緑の党が今や熱心にウクライナ戦争拡大の軍拡路線を走っていることを説明する。

世界核戦争の危険を阻止できるのは、社会的不平等とその原因である資本主義と闘う国際的労働者階級の運動の台頭を待つしかない。資本主義の解決不能な矛盾が支配階級を戦争へ向かわせるが、同時にその矛盾が社会主義革命の条件を構成する。戦争を革命へ！

³ ウクライナ戦争を利用して米国はヨーロッパ、特にドイツへの資本主義的攻勢を、ロシア経済制裁の名の下で、かけている。ノルドストリーム・パイプラインの破壊はロシア攻撃というよりは、ドイツやヨーロッパへの経済攻撃であろう。

⁴ ロシアは資本主義国であるにもかかわらず、ロシアを「アカの国」と思っている政治家が多い。

